

日本金属学会における 男女共同参画の歩み

御手洗 容 子*

1999年に男女共同参画社会基本法が制定・施行され、21世紀の日本最重要課題と位置付けられた⁽¹⁾。この法律の中で初めて「男女共同参画」という言葉が使われた。今さら言うまでもないが、「男女が互いにその人権を尊重しつつもその責任を分かち合い、性別に関わりなく、その個性と能力を十分に発揮できる社会」という意味である。2000年には、男女の均等な雇用の機会と待遇の確保などを掲げた男女共同参画基本計画が決定され⁽²⁾、2001年には内閣府に男女共同参画局が設置された。このような国の動きを背景に、2002年には、日本物理学会、応用物理学会、日本化学会などを中心に、理工学系の12学協会が集まり、男女共同参画学協会連絡会を発足させた(2016年現在、53学協会が参加)⁽³⁾。

1. 日本金属学会における男女共同参画活動のはじまり

日本金属学会(以下、金属学会)で男女共同参画活動が始まったのは、このような社会の動きの中で、比較的早い2003年のことである。私が学会の男女共同参画に関わったきっかけは東北大学の米永一郎先生からの1本の電話であった。先生は、所属されている東北大学や応用物理学会での取り組みについて説明され、金属学会でも男女共同参画活動のためのWGを作りたいと説明された。個人的なことになるが、当時、私は5歳と2歳の子供を育児中で、子育てをしながら仕事をすることが許される社会を求めているが、一方で、ただでさえ育児で仕事の時間が取れない中、男女共同参画活動をしていて良いのか、そもそも、学会で取り組む男女共同参画活動とは何か、という不安を抱いた。しかし、当時物理学会で男女共同参画活動をしていたNIMSの友人から話を聞いていたこともあり、WGに参加することを決めた。

WGは2003年8月に理事会で承認され、名古屋大(当時)

の黒田光太郎先生を委員長として発足した。当時の金属学会は、学会の座長、分科会世話人、編集委員、理事、役員などへの女性の参加がなく、辛ろうじて、まてりあ編集委員に女性が加わり始めた程度であった(委員長：深道明東北大教授)。第1期のWGメンバーは(当時所属、敬称略)、米永一郎(東北大)、後藤 孝(東北大)、今野豊彦(大阪府大)、木村薫(東大)、山下孝子(川鉄技研)、楠美智子(ファインセラミックスセンター)、八木晃一(NIMS)、吉原美和子(横浜国大)、加賀山朋子(熊大)、御手洗容子(NIMS)であった。2003年9月には、その前年に結成された男女共同参画学協会連絡会にオブザーバー会員として参加申請し、当時の連絡会が行おうとしていた大型アンケートに参加した。その年10月に開催された秋期学会で大型アンケートの回答を呼びかけたが、回答したのは271人だけであった。当時の会員数が7000人であったことを考えると、関心の低さが窺われる。また、この学会期間中に、第1回のWGが開催された。ここでWGは終了し、10月12日(WG開催翌日)から検討委員会として活動を行うことになった。

2. シンポジウム開催

男女共同参画活動を知ってもらうため、また学会内でこの活動の理解を得るために、まず取り組んだのはシンポジウム開催による啓発活動であった。2004年3月の春期大会最終日の午後、第1回の男女共同参画シンポジウムが「材料工学教育研究集会」として東工大の百周年記念館で開催された。この時の講演は、「自然科学および科学技術系の学会・協会における男女共同参画への取り組み」小館香椎子先生(日本女子大、男女共同参画学協会連絡会第1期委員長)、「科学技術分野における女性研究者の能力発揮」都河明子先

* 物質・材料研究機構 構造材料研究拠点：副拠点長、耐熱材料設計グループ グループリーダー(〒305-0047 つくば市千現1-2-1) Strides of Gender Equality in JIM; Yoko Yamabe-Mitarai (Research Center for Structural Materials, Deputy Director, High Temperature Material Design Group, National Institute for Materials Science, Tsukuba)
Keywords: *gender equality, network, symposium, nursery*
2016年5月26日受理[doi:10.2320/materia.56.116]

生(東京医歯大),「企業における男女共同参画の取り組み」渡辺美代子氏(東芝)であった。当時,学協会連絡会で活発に活動していた学会で活躍されていた方々である。小館先生には,自然科学分野で女性研究者が能力を発揮する重要性,学会でそれを支援することの大切さについてお話をいただき,金属学会での男女共同参画活動に大きなエールを送っていた。初回ということで,興味半分,冷やかし半分の聴衆が多かったように感じたが,会場がいっぱいになるくらい聴衆が集まった。シンポジウムの内容については,大型アンケートの解析結果や,日本物理学会(以下,物理学会)奈良女子大(松岡)や東北大(米永)の取り組みに関する記事を追加し

て,まてりあで小特集として紹介した⁽⁴⁾。2004年春期大会で第1回シンポジウムを開催した後も,男女共同参画という概念を学会内で広げるため,2004年から2008年の間に5回のシンポジウムを開催している(表1)。2004年秋には秋田大で第2回シンポジウムを開催し,第1回大型アンケートの報告(米永),金属学会の取り組み(御手洗),物理分野での取り組み(松岡),託児室に関する検討(米永)といった金属学会内での取り組みを紹介した。第3回シンポジウムは2005年3月,横浜国立大で「日本分子生物学会の取り組み」(東大・大坪久子先生),名古屋大での取り組み(名古屋大・東村博子先生,当時男女共同参画室長),物理学会における託児室運営(松岡)と他学会,大学での託児室の取り組みを紹介し,学会内での託児室設置が必要であることを示し,この時の理事会で託児室設置が承認された。

表1 開催したシンポジウム。

年	講師(所属・当時)	講演タイトル
2004年 3月	小館香稚子(日本女子大)	自然科学および科学技術系の学会・協会における男女共同参画への取り組み
	都河明子(東京医歯大)	科学技術分野における女性研究者の能力発揮
	渡辺美代子(東芝)	企業における男女共同参画の取り組み
2004年 9月	今野豊彦(大阪府大)	男女共同参画に関する学協会アンケート結果について
	御手洗容子(物材機構)	金属学会における男女共同参画に関するアンケート報告
	松岡由貴(奈良女子大)	物理分野における男女共同参画への取り組み
	米永一郎(東北大)	学会期間中の保育室設置に関する検討
2005年 3月	大坪久子(東大)	世代を超えた連携が成功をもたらした例:日本分子生物学会・年保育室 ことはじめ
	東村博子(名古屋大)	名古屋大学における育児支援の取り組み—学内保育所設置活動を中心に—
	松岡由貴(奈良女子大)	物理学会における託児室設置および運営状況
2006年 9月	田中龍彦委員長	日本鉄鋼協会男女共同参画準備会活動紹介
	黒田光太郎委員長	日本金属学会男女共同参画委員会活動紹介
	株式会社神戸製鋼所 人事労政部 松尾健志担当課長	神戸成功における男女共同参画活動
	日本アイ・ビー・エム株式会社 人事・組織 Yamato Lab テクニカル・バイタリティ 鈴木美登利課長	日本アイビーエムの取り組み—女性社員活用のためのプログラム
	株式会社リコー 人事本部 人材開発部国際人事グループ 小谷美樹マネージャー	リコーのジェンダーフリー推進活動
奈良女子大学 理学部物理科学科 松岡由貴	生涯にわたる女性研究者共助システムの構築	
2008年 3月	日本アイ・ビー・エム株式会社 板倉真由美氏	女性技術者育成の取り組み—施策とコミュニティー
	産総研 澤田美智子氏	女性研究者育成における独法研究所の役割

3. 大会期間中託児室設置

次に取り組んだのは,育児中の会員が講演大会に参加しやすい環境を作るための大会期間中の託児室設置であった。これは当時,男女共同参画活動を行っていた学会がまず取り組んでいたことであった。2004年秋期大会中に託児室に関するシンポジウムを行い,他学会や大学での託児室設置や利用状況,託児室設置のノウハウ,賛成派の意見(子供がいても学会に参加したい,若い人の励ましになる),反対派の意見(学会として子供の面倒を見る必要があるか,大会会場でなぜ子供が保育されなければならないのか,会場に子供など邪魔なだけではないか)などが示され,託児室設置の意味を委員の中で明確化し,設置に伴う問題点の対応などについて議論した。他学会で託児室設置活動をしていた人たちからは,子育てをしながら研究・学会活動をする事への学会会員の理解の低さが託児室設置のハードルになるため,設置の必要性や学会にとってのメリットについてしっかり示すようにアドバイスをされた。この頃,物理学会にも所属していた松岡先生(奈良女子大,現・金属学会男女共同参画委員会副委員長)に,検討委員会委員となつていただき物理学会での託児室設置について情報をいただいたのは大変心強かった。そんな中,第0分科から分科会活動へのお誘いがあり,分科会で大会期間中の託児室設置について理解を得るために引き受けた。

2005年春期大会中の分科会で決死の覚悟で託児室の必要性を説いたが,予想に反して特に反対意見もなく,あっさりと承認された。大会での託児室,という概念に違和感を感じている委員はいたようだが,今の世の中はそういう動きなのだから認めざるを得ないというようなムードがあったように思う。その後開催された理事会でも承認され,2005年,広島大学で開催された秋期大会での第1回託児室設置に向けた準備が始まった。この時,物理学会での経験がある松岡先生からいただいたノウハウが大いに役立った。子連れで大会に参加するというのが一体どういうことなのかを理解するために,まずは自分で利用することにした。私の他にもう

一人利用者がいたが、夫婦で大会に参加しており、当たり前ながら、夫婦で大会活動に参加する場合には託児室は大いに役に立つことに気がついた。託児室を利用した時、上の子が7歳、下の子が4歳であった。子連れで大変だったことは、余計にかかる交通費、宿泊費、夜の交流会に参加できないこと、荷物が重いことなどを感じたが、それよりも、出張中にも子供と一緒にいられる安心感というメリットの方が大きかった。大会会場内に子供がいるため、昼休みに子供の様子を見に行くことができたのは私自身が安心できたし、子供も私の顔を見て安心して遊んでおり、また大変楽しかったのか、4歳の下の子がしばらく覚えていて、「またあそこに行きたい」と言ったほどだ。利用してみて、託児室は育児中の研究者・エンジニアには大変ありがたい設備であると感じた。関東開催の春期大会も合わせて私はこれまでに3回利用した。託児室の利用は図1に示すように、それほど多くないし、増加もしていない。利用者が0の時もある。これは、育児人口が少ないこともあるし、子供を連れて来られる年齢幅が小さいこともある。0,1歳児は、一人で歩けず、体調管理も難しいことから、連れて歩くことがそもそも難しい。7歳をすぎると小学校を休ませなければならず、利用がしにくくなる。そうすると、3~6歳くらいの間が最適利用期間となる。このような理由もあり、利用者数が0であることもあったが、それでも希望者が利用できるように託児室の設置は毎回行ってきた。申し込み期間中に申し込みが無い場合は、託児室の設置はキャンセルされるため、費用は発生しない。年齢以外に利用しにくい理由があってはいけないため、利用しやすい制度作りも行っている。これまで、託児室利用料金は1時間800円の個人負担であったため、利用金額を下げる検討を行い、2016年秋の大会から、1日1500~2000円となっている。

4. 鉄鋼協会との連携

2006年になると日本鉄鋼協会(以下、鉄鋼協会)でも男女共同参画委員会準備会が発足する。東京理科大の田中龍彦先生を委員長として、2006年春期大会では、女性研究者の集

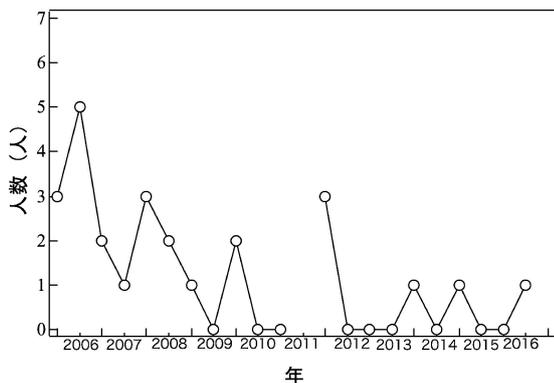


図1 託児室利用人数の推移。

いを開催し、企業、大学、独法での女性研究者・技術者の現状などを情報収集・意見交換した。また、2006年秋期大会では、金属学会、鉄鋼協会とで合同シンポジウムを開催した。「男女共同参画の取り組み—魅力ある職場組織作り—」と題して、鉄鋼協会男女共同参画準備会・田中委員長、金属学会男女共同参画委員会・黒田委員長、株式会社神戸製鋼所人事労政担当課長松尾健志氏、日本アイ・ビー・エム株式会社開発製造人事テクニカルバイタリティー課長・鈴木美登利氏、株式会社リコー人事本部人材開発部国際人事グループマネージャー・小谷美樹氏、奈良女子大学・松岡由貴先生をパネリストとして、パネルディスカッションを行った。

2007年3月に金属学会と鉄鋼協会の合同委員会が発足し、共同で行えるような託児室の設置、イベント開催などは協力し合うことを決めた。また、早速、会員への情報発信のため、男女共同参画委員会のHPを作成し⁽⁵⁾、男女共同参画に関わる意見交換のためのメーリングリスト(ML)を作成した。MLではあまり活発な情報交換ができなかったため、2015年秋からfacebookを立ち上げた。(男女共同参画に関する情報交換グループ(金属学会・鉄鋼協会)、兵庫県立大・三浦永理先生担当)。そこでは男女共同参画に関する記事などを投稿して、活発に情報交換をしている。

5. 男女共同参画学協会連絡会

始めに書いたように、男女共同参画学協会連絡会は2002年に結成され、金属学会はオブザーバー学会として2003年から参加している。2003年に参加学協会の会員を対象に大型アンケートを行い、回答者数19291人という膨大なデータを集めた⁽⁶⁾。これにより、科学分野における女性研究者・技術者の境遇、問題点を明確化し、女性研究者・技術者が抱える問題を解決するための提言を各政府機関に提出するなど活発な活動をし、これがその後の女性研究者支援のための振興調整費プロジェクトなどにつながっていく。金属学会は2003年に開催された第1回シンポジウムから参加し、これらの活動に賛同してきた。2004年第2回、2006年第4回シンポジウムではWG活動も行い、シンポジウムの企画を支えた。2007年には次世代の科学人口を増やすため、また、女性が科学分野へ進学することを応援するため、女子高生を対象とした夏の学校を開催した(後に対象を中学生にも広げ、女子中高生夏の学校となった)。2泊3日で埼玉県の女性教育会館に宿泊し、理系分野に進学した女子大生と共に学会が提供する実験講座やポスター発表に参加したり、科学分野で仕事をしている人のキャリア形成に関する講演を聴き、科学への興味を誘う企画である。金属学会も鉄鋼協会とともに参加し、ポスターを隣同士に並べ、鉄鋼協会は種類の異なる鋼を曲げさせることによって強度が違うことを体験させ、金属学会は、金属当てクイズ、形状記憶合金、熱電変換材料(東大・木村薫先生)の実験などを行った。それ以降、毎年夏の学校には参加している。2008年からは2時間程度の実験講座も担当し、金属の加工熱処理実験や低融点合金を用いた



図2 男女共同参画委員会のロゴ。

メダル作りなどを行っている。2015年には生体材料の実験も加わり、関大・上田正人先生によるTiの陽極酸化、陽極酸化後のTiに吸着させたたばく質をたばく質検出キットで検出する、という新しい実験も加わった⁽⁷⁾。また関西で行われている同様のイベント、関西科学塾にも金属学会、鉄鋼協会は共に協力団体として加わっており、実験講座のサポートも行なっている。

7. 合同委員会ロゴ作り

2009年には、合同委員会のロゴを作成した。NIMSの大出真知子委員の配偶者である山崎壮氏(2012年ランチョンミーティング講師)によるデザインで、男女で協力して社会を作っていくイメージである(図2)。これ以降、合同委員会としてポスターやチラシを作成するときには、必ずこのロゴを使うようにしている。

8. ランチョンミーティング

2009年春期大会から、ランチョンミーティングを開始した(表2)。大会3日目のお昼休みを利用して、(男女問わず)学生向けのキャリア紹介講演を行っている。先着30名に弁当を無料配布し、金属材料を勉強して様々な分野で仕事をしている人達に仕事や家庭との両立について講演をして頂いている。TMSのYoung Leaderにアメリカの女性研究者の状況を講演してもらったこともあり、この時は外国人学生も参加して、ちょっとした国際会議のような雰囲気となった。これまで2人の講演者をお願いしていたが、十分な議論ができないため、2016年春のランチョンミーティングでは講演者を1人にし、その後に質疑の時間を長めに設けた。ランチョンミーティング終了後にも何人かの参加者が残り、講演者としてしばらく話をしていたため、このような交流が若い世代の会員を励ましてくれることを実感した。

9. 女性会員のネットワーク作り

2011年秋からは、お昼休みを利用した女性会員の集いを開催している。こちらは、参加者が自分で昼食を持参し、それを食べながら交流するというものだ。特に話題は決めず、集まったメンバーが自己紹介をして、気ままに話をしたり、時にはある話題について議論したりする。ランチョンミーティングもつどいも昼休みという時間制限があり、昼前後に自分の発表や座長があると慌ただしく、ゆっくり話ができない。そこで2014年から、春期大会時には、インフォーマル交流会も行っている。このような活動を通じて女性会員のネ

表2 ランチョンミーティングリスト。

年	講師(所属・当時)	講演タイトル
2009	梅津理恵(東北大学多元物質科学研究所・助教)	大学における女性研究者
	山下孝子(JFEスチール株式会社・スチール研究所主任研究員)	企業における女性採用変遷とキャリア構築
2010	宮島雅史(ボッシュ株式会社・テクニカルセンターマネージャー)	技術調査と技術移転の研究、ドイツのここを分るための独語学習の毎日
	齋藤規子(株式会社IHI電力事業部電力保守技術課長)	気負わず、あせらず、自分らしく
2012	山崎 壮(アルプス電気株式会社)	研究者を伴侶にするということ
	芹沢 愛(大阪大学マテリアル生産科学専攻)	オークリッジ国立研究所にて—アメリカ流研究スタイル、異文化に触れて
2013	金子美智代(トヨタ自動車株式会社)	解析に魅せられて
	久布白圭司(株式会社IHI)	我が家の食卓〜妻の好物は、焼き豚♪〜
2014	Michele Manuel, Univ. of Florida	Current situation of female researchers in USA
	吉原美知子(横浜国立大学)	第3回男女共同参画大型アンケート報告
2015	宮下直子(エイチ・シー・スタルク株式会社)	Strength as being a Female Workforce in Technical Field—Personal Point of View
	Qizhen Li(Washington State University)	Women Scientists and Engineers in USA
2016	中田英子(旭硝子株式会社生産技術センター)	出産が仕事に与えた advantage〜冶金を軸に金属の外を歩く〜

ットワークを形成することにより、女性会員が金属材料の分野で活躍し、学会でも活発に活動していければと思う。

10. 役職比率調査

男女共同参画活動を始めた2003年頃、金属学会の主要な役職には女性がほとんどいなかった。その後、男女共同参画学協会連絡会の調査もあり、2年に1回、役職比率調査を行っている。理事や委員会の委員長などの役職にどのくらい女性が就いているかという調査である。図3に主要な役職の変遷を示す。2005年には、男女共同参画委員会委員以外ほとんど女性がおらず、特に、代議員、理事は0人であった。まず、まてりあ女性編集委員が増え、会誌・欧文誌編集委員にも数人いたが、2015年の段階では0人になっている。一方、代議員は増加しており、2015年は3人、それに対応して理事は2013年から1人になっている。この調査では調べられていないが、委員会委員長は、私の記憶では、男女共同参画委員会(現・東北大・梅津理恵)以外にはおらず、2015年からまてりあ編集委員会の委員長に在る程度である。この他に、女性の活躍度を示す指標として座長やシンポ

